

## 放浪者ジャック・ロンドンのトランプとホーボー

齋藤忠志

### はじめに

1850年、アメリカ合衆国内陸部に9000マイル敷かれた鉄道路線は、10年後の1860年になると、30000マイルに達し、1869年5月10日には、ユタ州プロモントリーで、ユニオン・パシフィック鉄道と、セントラル・パシフィック鉄道が結ばれ、大陸横断鉄道が完成する。この鉄道の発展とともに、アメリカ社会に、ホーボー (hobo)、トランプ (tramp) という放浪者が登場する。1875年以降、家を持たぬ放浪者が、路上をうろついたり、鉄道を無賃で利用するようになる。彼らは、鉄道保安官の目をぬすみ、貨車にもぐりこむのだ。しかし、この放浪者ホーボー、トランプには、バム (bum) という類語がある。彼らに共通しているのは、生活手段に欠け、あてもなく、つねに移動しつづける点である。しかし、これらの中で、放浪者という意味で最もふさわしくないのは、あまり移動せずに、だらだらと日々を送るバムであろう。各地を転々と放浪し続けるという点で共通しているのは、ホーボーとトランプである。ホーボーとは、何かの理由で継続的な仕事を止めるか、または単に仕事を失うことで、放浪の旅に出、必要に迫られた時だけ働くが、ときには、季節的な仕事につくこともある放浪者のことであり、ホーボーと同じく放浪はするが、全く仕事をしない放浪者はトランプとなる。

1920年代に放浪者の数は減少するが、不況の30年代にはいと急激に増加する。しかも男性だけでなく女性の放浪者も加わることになる。また、40年代に入る前に、輸送手段が列車に自動車が増えると、自動車は自動車ホーボー、自動車トランプとも言える白人季節労働者オーキー、アーキー<sup>1</sup>をつくり出す。しかし、第二次世界大戦がはじまると、不況時代は終わり、戦後は輸送手段が貨物列車や自動車から、長距離トラックへと変わる。そこで、貨物列車をただ乗りすることから始まったホーボー、トランプは消滅に向かう。

アメリカで上述の放浪者を扱った最初の文学作品は、ブレット・ハート (Bret Hart, 1836-1902) のスケッチ風の短編「わが友とランプ」(“My Friend, the Tramp”, 1877) である。その後ホーボーやトランプを扱った社会学的な研究書物は増えていくが、彼らを主題とする作品に、文学的価値を持たせたのは、機関車とともに登場した放浪者を自らも体験したジャック・ロンドン (Jack London, 1876-1916) である。彼は十八歳の時に放浪生活に入るのだが、作品には、小説というより多くのエッセイの中に放浪者、特に、トランプを登場させている。その理由は後述するが、実体験をエッセイにまとめたものに『ザ・ロード』(*The Road*, 1907) という作品があり、また、その路上生活の経験により生まれたといえる『どん底の人々』(*The People of Abyss*, 1903) では、英国ロンドンのイーストエンドというスラム街に住む労働者たちの悲惨な生活について報告している。本稿では、18歳のとき、なぜロンドンはそのような放浪の旅に出ることになったのか、また、彼の視点を通して、経済上、当時のアメリカ資本主義社会において、ホーボー、特に、トランプとはどういう存在として位置づけられていたのか、さらには、『どん底の人々』のような社会学的記録も含め、トランプやホーボーについて書いた作品を、文学的に価値のあるものにまで高めたジャック・ロンドンは、後に、直接間接、他の作家たち、また、

他の分野にどのような影響を与えることになったのかについて考察したい。

### (1) 放浪者ロンドンの起源をさぐる短編「背教者」

実は、ロンドンが長編小説の主人公としてトランプやホーボーを使っている。数多い短編の中でさえ、トランプやホーボーの問題にふれているのはごくわずかである。なぜなのだろうか？ ロンドンは、自伝的作品『ジョン・バーリーコーン』(*John Barlecorn*, 1913)の中で次のように述べている。

私は、さっそく一生かけての仕事に専念することに決めた。私にはやりたいことが四つあった。まず、第一に作曲、次に詩作、三番目は哲学や経済、それに政治に関する評論、そして四番目に、最後に最低の望みとして、創作がきた。<sup>2</sup>

第一、第二は別にして、第四番目の最低の望みとして創作がきていることが理由なのだろうか。それにしてもあまりにも多くの小説、短編を書いている。それではホーボーやトランプを主人公として使うむずかしさがあったのだろうか。きわだって生活手段に欠け、根無し草的であり、つねに移動しつづけるトランプやホーボーに家庭的問題はあまり存在しない。また、彼らは富や権力を追求する闘争とも切り離されている。ある意味で、自力ではどうにもならない、環境の犠牲者であるといえる。対等な立場で何かに戦いを挑むことを好んだロンドンは、社会的には敗者とみなされるトランプ、ホーボーをあまり使いたくなかったのかもしれない。ここでは数少ないトランプやホーボーに関する短編の中から、「地方色」(“Local

Color”）、「ホーボーと妖精」（“The Hobo and Fairy”）、「背教者」（“The Apostate”）の三編について検討したい。

「地方色」は、1903年10月号の『アインスリーズ・マガジン』に発表されたが、作品の冒頭から「ヘンリー四世」から一節を引き合いに出しながらホーボーという言葉の由来からその意味を切々と語るインテリ・トランプが中心人物である。この博識多才のリス・クレイ・ランドルフは、彼を迎えてくれた家で、無遠慮に相手の高級な葉巻を吸ったり、高価なワインを飲みながら、しかも相手が驚くような多くの話題について淡々と語るトランプである。彼が、語り手である私に話すその内容を要約すると次のようになる。ケンタッキイ州出身のこの紳士トランプは、金欲しさから、トランプと彼らを虐げる警察との関係を記事にしたいと、カウベル新聞社に赴く。書いた原稿は受け入れられるが、それが、近いうちに行われる新警察所長の選挙に利用されることになる。手に入った原稿料で、仲間のトランプたちとたらふく酒の飲むが、よく朝、その仲間と一緒に浮浪罪で刑務所へ送り込まれ、法廷へ引っぱり出されたインテリ・トランプは、カウベル紙に書いた記事の内容で三十日、酒に消えた原稿料により財産浪費のかどで三十日、合わせて六十日間の監禁に処されてしまうことになる。この人物が語る、トランプの人権を全く認めようとしない強引な逮捕による警察権力との戦いは、エッセイにもよく出てくるが、この作品は、エッセイに比べると、主人公のトランプの設定の仕方に作り物の感があると言わざるを得ない。

次に挙げる「ホーボーと妖精」は、『サタデー・イブニング・ポスト』誌1911年2月号に発表されている。これは、一人の妖精のようなサマリヤ人の子どもが示した親切な行為により、肩幅が広く、首が太い頑強なトランプが改心し、ついには一度は止めた仕事にもどるという話である。テキサス州で生まれたロス・シャンクリンは、17歳のときに、実際には盗

んではない七頭の馬を盗んだかどで、12年間投獄されるという有罪判決を受けてしまう。前科のないこの男には大変厳しい判決であった。シャンクリンは最初はまじめに労役に服していたが、その後何度か脱獄を試みる。しかし成功することはなく、捕まると、体をロープで吊り上げられ、気絶するまで鞭打ちの刑をうけ、意識が回復すと、また鞭で打たれた。あるときは、90日間地下牢に投獄されることもあった。さらに、他の囚人が、看守の手荒い行為により、立ち直れないほどの傷を体に受けたり、神を呪いながら絞首台へ向かうのを目の当たりにする。12年後、5ドル貰って出所するが、その間における看守らの残酷無比な行為により、人間不信に陥ったこの男は、解放され自由の身になったにもかかわらず、仕事をすることが大嫌いになり、仕事を軽蔑するまでになってしまう。そしてシャンクリンはトランプとなる。彼が過去を回想するこれらのシーンは説得力があり、切実感のある場面といえる。しかし、少女と別れた後、彼女の親切な行為により、心改め大きな農場で馬を引く御者としての仕事をすることになるのだが、刑務所における出来事を回想する場面の後は、感傷的になりすぎてしまっているといえよう。この二つの短編から、ロンドンが、小説ではなく、エッセイの中で多くのホーボーやトランプを描いたことの原因を察することができよう。

1906年9月に『ウーマンズ・ホーム・カンパニオン』誌に発表された「背教者」は三つの短編の中ではいちばんロンドンの自伝的色彩の濃い作品である。ロンドンは11歳で朝夕の新聞配達、休刊日の週末は、氷屋での配達係や、ボーリング場でのピン立て係などの仕事で家計を助けている。また、1893年には、この作品の舞台ともなっている黄麻工場で働いている。一時間10セントで一日10時間の労働であったという。

黄麻工場の機械部屋の中で、肺から糸屑を追い出すために咳をしながら生まれたこの作品の主人公のジョニーは、7歳ですでにこの家の家長であ

り、一家を支える働き手である。しかし、18歳となったジョニーの体はすでにボロボロで、7歳から18歳までの12年間で人間が一生かけて働く労働時間を終えてしまった老人のようだ。ある日ジョニーは悪性のインフルエンザにかかり、二週間ほど仕事を休む。生まれてはじめての休養期間だ。すると、ジョニーはその休養が切掛けとなり、家族や職を捨てて家を出てしまう。ロンドンでは、ジョニーの歩く姿を次のように描写する。

彼の歩き方は人間らしくなかった。人間には見えなかった。人間の戯画であった。両腕はだらしなくぶら下がり、しかも猫背で胸幅もなく、グロテスクで恐ろしい病弱な猿であった。よろよろ歩く姿は、体がねじれ、発育の止まった名もない生命の塊であった。<sup>3</sup>

物語の最後で、この「名もない生命の塊」が、生まれ育った土地を離れるときの様子は、作品全体に漂う悲痛な暗さと重なり、衰れを誘い印象的だ。

たそがれ時が過ぎ、夜の最初の暗闇の中で、貨物列車が音をたてて駅に入ってきた。ジョニーは空の有蓋貨車のドアを引いて開けると、不恰好な動作でやっと中に入った。それからドアを閉めた。汽笛がなった。ジョニーは横たわりながら暗闇の中で微笑んだ。<sup>4</sup>

社会党紙『コムラード』の1905年11月号に載せた「私にとって人生とは何か」(“What Life Means Me”)の中で、自分の筋肉に自信を持ち、重労働が大好きであると自ら述べていた労働階級の金毛獣(または超人)ロンドンも、ある雇い主から死ぬほど働かされ、働くことがいやになると、

働きすぎて、うんざりしていた。再び仕事を探すなんてもうまっぴらだった。私は仕事から逃げ出した。私はトランプになって家から家へと物乞いをしながら合衆国じゅうを放浪し、そして、スラム街や刑務所で血なまぐさい汗をかいた<sup>5</sup>

と言っている。また、『ジョン・バーリーコーン』の中で次のようにも言う。

私は、仕事をやりすぎた結果、もう仕事をすることにうんざりしていた。もう働くのはいやだった。仕事のことを思うだけで、身震いがした。落ち着けなくなってもかまうことはない。手に職をつけるなんてまっぴらだ。以前のように、この世は楽しく浮かれ騒ぐほうがいい。そこで、私は冒険街道へもう一度繰り出した。鉄道を利用し、東部へと向かって放浪の旅に出た。<sup>6</sup>

「背徳者」では、当時の機械文明に侵された社会に対する批判を行っているという見方もできよう。ロンドンが、ジョニーを「猫背で胸幅はなく、グロテスクで恐ろしい病弱な猿であった」と、戯画化して描き、重労働により肉体を酷使し、猿に似た「発育の止まった名もない生命の塊」を通して、人間性をも喪失させてしまう機械万能主義の社会の恐ろしさを訴えている。ロンドンが、「背教者」のジョニーのように、少年時代の体験からトランプとしての放浪生活を始めたことは、上述の引用で明らかであろうが、「背徳者」では、ロンドンは、自らの体験を自らの中で消化し、客観視することで、実際のロンドンの姿とは距離を置いている。ジョニーを機械文明の犠牲者として戯画化し、「グロテスクで恐ろしい病弱な猿」と描写しているからだ。ジョニーが貨物列車の床の上に横たわり「暗闇の

中で微笑んだ」のは、人間性をも喪失させてしまう機械文明の恐ろしさから脱出できたことと、これからトランプとして放浪生活に入れろという心の安らぎを感じたからではないだろうか。

この「背徳者」は、ロンドンのトランプ、ホーボーの起源の一つをさぐる作品であり、重労働にすっかり疲れはて、仕事を続けることが出来なくなり、これからトランプ生活にはいっていかうとするロンドン自身の様子を描いた作品であるとも言える。ここには上述の二つの短編のような感傷の押し売りはなく、地味ではあるが、自伝的要素の濃い、また当時の社会を見据えた説得力のある作品といえる。

## (2) 「私にとって人生（放浪生活）とは何か」

ジョニーが心の安らぎを求めたトランプという放浪生活とは、実際にはどんなものであったのだろうか。ジョニーと同年の十八歳で、路上でのトランプとしての生活に入ったロンドンは、しばらくして彼がとんでもない場所に足を踏み入れたことに気づく。

先ほどの「私にとって人生とは何か」では、トランプとなったロンドンが、その放浪生活の不安と恐怖について述べている。

私は労働者階級に生まれたが、十八歳になった今、私はその出発点以下のところにいた。社会の最下層にあって、語るに相応しい言葉もない困窮のどん底にいた。地獄というか、どん底というか、掃きだめというか、文明の修羅場・死体安置所にいた。そこは、社会が無視するような社会組織の一部だった。紙幅がないためにここでは無視せざるを得ないが、そこで見たものに度肝を抜かれたことだけは言うておこう。<sup>7</sup>



ロンドンは仕事をする事もなく、仕事を探す事もなく、昼間は食事を乞って回り、夜は、留置場かホーボー・ジャングルですごした。彼は、実際の体験から1904年二、三月併号の『ウイルシャーズ・マガジン』に発表されたエッセイ「ザ・トランプ」(“The Tramp”)の中でトランプについて次のように説明している。

仕事を求める人の数が仕事より多ければ、余剰労働集団というもの必然的に生まれる。この余剰労働集団とは経済上必要悪である。これがなければ、現在の社会はバラバラになってしまうだろう。余剰労働集団の仲間たちの間で、仕事を獲得するための争いは、浅ましく残酷である。社会の落とし穴の底での闘争は冷酷で獣的である。この闘争はあきらめを生むことになり、このあきらめた犠牲者たちが犯罪者でありトランプなのだ。トランプは、余剰労働集団のように経済上の必要悪であるというのではなく、経済上の必要悪の副産物なのである。「路上」というのは一種の安全弁であり、社会構造の廃棄物が捨てられる排気口なのだ。この捨てられるということが、トランプに負の機能を生じさせる要素となる。<sup>8</sup>

ロンドン、トランプとは、経済上の必要悪ではなく、余剰労働者集団という経済上の必要悪の集団の、あさましく残酷な闘争の敗北者、つまり経済上の必要悪の副産物であると結論づけている。人間は、社会の落とし穴に落ち込み、仕事がいやになるのもやむを得ない扱いを受け、世捨て人かトランプになるのだとロンドンは言う。人間性をも喪失させてしまう機会文明の恐ろしさから脱出したように思えたジョニーが、これから貨物列車に乗って行く場所は、やすらぎの地どころか、さらに残酷な「地獄とい

うか、どん底というか、掃きだめというか、文明の修羅場・死体安置所」であり「社会が無視することにした社会組織の一部」へ向かって行くことになるのだろうか。

### (3) 「私にとって人生（もう一つの放浪生活）とは何か」

ロンドンがトランプ、ホーボーについて書いた作品の中で、特に興味深いのが『ザ・ロード』（*The Road*, 1907）であると言えよう。これは「アンダーワールドにおける私の日々」と題された、1907年『コスモポリタン』誌に発表されたシリーズが、同年の11月に単行本として上梓されたものである。一説には、この作品は、ロンドンが単に自分の船スナーク号建造の資金目当てに書いたとも言われているが、ここには、18歳に厳しい少年時代の生活から逃げ出し、トランプの生活を体験する生き様がリアルに描かれているといえよう。ここで9編の作品のうちのいくつかを取り上げ検討したい。

「告白」（“Confession”）は、1892年の夏の浮浪体験を語ったものだが、ロンドンはここで、物乞いとは一種のゲームであり工夫が必要であると言う。

まず、第一に、出会った瞬間、乞食はその相手を「見きわめ」しなければならない。その後、その相手特有の個性や気質を極めたら、訴えかけるような話をしないといけない。ここで、大きな問題が生じる。つまり、相手を見た瞬時に、話をはじめなければならないということだ。準備には一分たりとも許されない。電光石化のごとく相手の性格を見抜き、急所をつくような話を思いつかなければならない。要領のいいルンペンには、芸術家でなければならない。創作は自由自在に、し

かも即時でなければならない。——それも、豊かな自分の想像力から選んだテーマに基づくものではなく、ドアを開けた人の顔から読みとったテーマに基づいたものでなければならない。<sup>9</sup>

また、ロンドンは次のようにも言う。

物語作家としての私の成功の多くは、このトランプ時代の訓練に拠るところが大きい。生きるための食べ物を得るには、もっともらしく聞こえる話をしなければならなかったのだ。<sup>10</sup>

ロンドンは、トランプ時代の経験を素材にして後に多くの作品を残してはいるものの、この時代に生きていくために食べ物を得ることが、芸術家として、特に、物語作家として開花するための修業時代であったと自ら述べていることは大変興味深い。

しかし、この『ザ・ロード』の中で繰り返し出てくるのは、強引な逮捕、法廷での裁判そして服役と、トランプの人権を認めようとしない刑法制度や警察権力との戦い、それに無賃乗車で彼らがアメリカじゅうを放浪するための、貨物列車の制動手との駆け引きなどである。「しょっぴかれて」(“Pinched”)では早朝、ナイアガラの滝を見に行く途中、放浪罪で有無を言わず逮捕され、三十日間の投獄暮らしという有罪判決を受け、「デカ」(“Bulls”)では、ロンドンの父(養父)ジョン・ロンドンがかつて巡査であり、生計を立てるために、浮浪者狩りをしていたことを紹介しているが、ここでは、浮浪者ロンドンが後を追ってきた警官に、いきなりこん棒で頭を殴られるという警官の不当行為や、「夜を走るルンペンたち」(“Hoboes That Pass in the Night”)と同様に、トランプと機関車の制動手との駆け引きが描かれている。

1894年、ジャコブ・S・コクシーが、失業者に、仕事を提供しようとする計画を実現させるために、彼らと一諸にワシントンまでの大行進を行うが、その際に、サンフランシスコで西海岸派遣団のリーダーとなるのが、チャールズ・T・ケリーであり、その失業者の大群の様子を描いたのが「二千人のルンペン」(“Two Thousand Stiffs”)である。ロンドンも1894年に始まったこの行進に参加しているが、この作品の中に出てくる失業者たちは、『ザ・ロード』の他の作品に登場する、働くことを全面的に否定する tramp ではなく、仕事にあふれ、自分ではどうしようもならない境遇により放浪をつづけているホーボーである。

話は、ロンドンを含む九人のホーボーが、ケリー將軍との駆け引きにおいて、行進隊の指揮官を騙して、行軍の途中、農民や町の人たちが隊に提供してくれる食料や衣類の最良のものを、いかにくすねたかを陽気に紹介している。

また、次に引用する場面では、彼らが本当にホーボーなのかどうか疑わしいほどである。

晩になると、われわれの野営地には町中の人々がやって来た。どの歩兵中隊でもキャンプファイアが焚かれ、どの火のまわりでもそれぞれ何かが行なわれていた。わが歩兵中隊、つまりL歩兵中隊の料理人たちは歌と踊りが上手で、催し物のほとんどに参加した。野営地の別のところでは、合唱団がよく歌を歌っていた。その人気歌手の一人は、L歩兵隊から引っぱられた「歯医者」で、われわれは、彼のこと大変誇りに思っていた。<sup>11</sup>

ここにはホーボーの暗さや惨めさなど微塵もない。あるのは、お祭り騒ぎと自分たちの歩兵中隊の自慢話だ。厳しい生活を強いられながらも、九

つの作品からなる『ザ・ロード』のなかに一貫して流れている基調は興奮と冒険である。金儲けのためにいっきに書き上げたといわれる所以がここにあるのかもしれない。トランプやホーボー生活という惨めな生活の中で、あくまでも肯定的で楽観主義的なこの傾向は、ロンドン自身の性格からくる明るさもあるだろうが、元来、ロンドンの書く作品にははっきりとした二つの傾向がある。一つは、社会主義者として、自らの体験から作品を書く場合、現実を冷静に凝視し、本人の感情をおさえ、対象を客観視するリアリストの姿勢であり、他の一つは、自らの体験を語る場合でさえ、楽観主義的で主観的要素が強いロマンチストの姿勢だ。リアリスト作家としてのロンドンは、労働者階級またはホーボーやトランプのような社会的弱者の側に立ち、真実を追究することで、社会矛盾を告発するが、その場合は、むしろ悲観論的だ。前述のように、エッセイ「私にとって人生とは何か」や、「ザ・トランプ」では、ロンドンは、ホーボーやトランプを、社会の最下層で厳しい生活を強いられる社会的弱者として見なした。しかし、『ザ・ロード』では、同じトランプ、ホーボーに対して、彼らが、どんなひどい打ちを受け、打ちのめされようが、とにかく頑張っている生きていけば、そのうち何とかなるだろう、といった楽観主義的でロマンチストであるロンドンの姿勢が窺える。ロンドン自身がトランプ体験から得たもう一つの結論がここにあると言えよう。つまり、機械文明の犠牲者となった「背教者」の主人公ジョニーは、「社会の最下層にあって、語るに相応しい言葉もない、困窮のどん底」である「文明の修羅場」を抜け出し、『ザ・ロード』の中のロンドンのように、ホーボーやトランプの人権を認めようとしないう刑法制度や、警察権力と戦い、どんなに打ちのめされようが、頑張っている生きていけば、そのうち何とかなるだろう、と楽観主義的に放浪生活を送っていたかも知れないのである。

## おわりに

「ザ・トランプ」の中でロンドンが語っているように、ただ各地を転々と移動するホーボー、トランプとは、経済上の、つまり資本主義社会における避けがたい必要悪の副産物であり、ロンドン自らが体験したそのトランプの生活の中から、彼は、彼らをアメリカ社会における経済的矛盾、つまりアメリカ資本主義の経済的矛盾を暴露させるための象徴的人物として作品世界に登場させた。ロndonは、リアリスト作家として、彼らをアメリカ資本主義経済の不可避的存在として明らかにしようとしたのである。しかし、一方、『ザ・ロード』では、ロndonは「ザ・トランプ」と同様自らの体験により放浪生活について語っているにもかかわらず、楽観主義的で主観的要素が強い、ロマンチスト作家として、ホーボー、トランプを描いた。このリアリストとロマンチストという二つの姿勢は、ロndonが生涯持ち続けた未解決なままの姿勢でもあり、「ニーチェの超人思想とマルクスの唯物史観、理想主義と現実主義、未開と文明、プブルジョア意識とロレタリア趣味——これら各種の対立関係にあるものは、ロndonの内部では、生涯未解決のままだった。最後まで分裂作家であった」<sup>12</sup>と言えよう。しかし、ロndonの作品群は、見方によれば、ダイナミックでつかみどころのない独特な世界を創り出しているとも言える。例えば、短編「ゴリア」(“Goria”, 1910)では、個人という弱者が試行錯誤を繰り返しながら、目指す社会に時間をかけて、少しずつ近づいて行こうとするのではなく、いきなりゴリアという正体不明のニーチェ的超人が現れ、上から一気にアメリカ全土を、さらには全世界を支配する。すると、超人ゴリアは社会主義者に変身し、アメリカでの幼年労働の廃止、労働時間の短縮などを実現させ、全世界に向けては、戦争を反社会的なものとし、国家の武装を解除させるなど、思い通りの社会を創り上げていくといった具合

だ。ロンドンの作品の再評価を試みるなら、矛盾は矛盾として認め、その矛盾の背後にある作家ロンドンの作品の魅力を探らねばならない。「ザ・トランプ」と『ザ・ロード』は、アメリカでの社会的歴史的現象として、鉄道的发展とともに出現し、衰退とともに、消滅に向かったアメリカの放浪者ホーボー、トランプを取り上げているが、この二つの作品には、リアリスト作家ロンドンと、ロマンチスト作家ロンドンが持つそれぞれの魅力が見事に描かれているといえる。ロンドンの自伝的要素が濃い「背教者」の主人公ジョニーは、人間性をも喪失させてしまうほど恐ろしい機械万能主義の社会から脱出し、有蓋貨車に乗ると、「横たわりながらその暗闇の中で微笑」むのだが、その後のトランプ生活では、ロンドンが実際に体験したように、その「出発点以下」の「社会の最下層」の生活を強いられたことは予測できる。しかし、またその最下層で、どんなひどい仕打ちを受けても、ジョニーは、戯画化して描かれてはいるものの、ロンドンのように、仕事をせずに、どうにか頑張って生き延びていくことも想像できるのである。

ジョン・パスス (John Dos Passos, 1896-1970) は『USA』(1937)の中で、ホーボーを語るのに、マックとベン・コンプトンという二人の中心人物を使っているが、かれは、ロンドンのように、経済上の問題として取りあげたのではなく、政治的問題として、その政治的自由を守るための闘争の中に登場させた。ジャック・ケルアック (Jack Kerouac, 1922-69) は、ロンドンがトランプとして放浪の旅に出た同じ十八歳のときに、「ジャック・ロンドンの伝記を読み、自分も冒険家や孤独な旅人になろうと思った」<sup>13</sup>、と作品『孤独な旅人』(*Lonesome Traveler*, 1960)の中で語っているが、実際に国内外を旅して回る放浪を体験している。『ザ・ロード』のようにケルアックの『路上』(*On the Road*, 1957)も詳細に記録された日記に基づいており、二人は好奇心の強さ、純粹さ、エネルギッシュな点で共通

するが、ケルアックは、対抗文化の時代に生きる若者の、時代への愛をもてない姿を、社会にはびこるペシミズム時代の価値観の追及を象徴的に示すために、放浪者を登場させた。

1973年には、監督ロバート・アルドリッチ、リー・マービン主演の『北国の帝王』(*Emperor of The North*)というホーボーを扱った映画が創られている。1930年代という大不況期の中西部が舞台のこの映画は、列車にただ乗りする浮浪者の帝王と、それを阻止しようとする車掌との対決が描かれている。ロンドンのエッセイの中に出てくるようなホーボーたちから「北国の帝王」とよばれるホーボーと、無賃乗車を絶対に許さないシャックという19号列車の車掌である「超人」との命がけの戦いである。

また、1984年には、文化人類学を専攻する一人の学生(テッド・コノヴァー、Ted Conover)が企てたホーボー体験旅行の記録である『ホーボー列車に乗って』(*Rolling Nowhere*)が出ている。ホーボーとは、元来、南北戦争に従軍した兵士が、戦後、故郷に帰ると言い、道の代わりに鉄道線路の上を歩いて放浪したのが最初であるという説もあるが、鉄道トランプ、ホーボー以外に、ジョン・スタインベック(John Steingek., 1902-68)の、『怒りの葡萄』(*The Grapes of Wrath*, 1939)の中のオーキー(白人季節労働者)を含む自動車トランプ、ホーボー、ケルアックの放浪体験など、自らが体験し、理解をもって文学の作品世界に登場させたジャック・ロンドンのトランプ、ホーボーは、その後、いろいろな形で直接間接、他の作家、また他の分野に少なからず影響を与えてきたといえよう。

#### 註

- 1 オーキー(Okie)とはオクラホマ州の人(Okulahoman)を軽蔑的に呼ぶ差別語。社会言語学的には、オクラホマ州だけでなく、テキサス州中央部、ミズリー州南部、アーカンソー州西部から、旱魃、砂嵐などのために農地



を失い、1930年代に、カリフォルニアに移住してきた30万人以上の移住農業労働者を軽蔑的に総称したもの。アーカンソー州からの移住農民をアーキー (Arkie) と呼んだ。オーキーたちは、サリーナス平野 (Salinas Valley) とサン・ウオーキン平野 (San Joaquin Valley) の一帯に集落をつくった。この集落は、リトル・オクラホマ (Little Okulahoma) と言われたが、スタインベックの『怒りの葡萄』は、彼らの苦しみと闘いが描かれている。

- 2 Jack London, *John Barleycorn*, The Works of Jack London 24 vols. (Tokyo : Hon-No-Tomo-Sha, 1989), 19 vols. pp. 220-21.
- 3 Jack London "The Apostate", Jack London : The Novel and Stories (New York : Literary Classic of the United States, 1982), pp. 815-16.
- 4 Ibid. p. 816.
- 5 *The Social Writings of Jack London* ed. Philip S. Foner : Citadel Press, 1947), p. 394.
- 6 *John Barleycorn*, p. 201.
- 7 *The Social Writings of Jock London*, pp. 394-95.
- 8 Ibid., p. 486.
- 9 Jack London, *The Road*, The Work of Jack London 24 vols. (Tokyo: Hon-No-Tomo-Sha, 1989), 11 vols, p. 9.
- 10 Ibid, p. 10.
- 11 *The Road*, p. 179.
- 12 齋藤 忠志「弱者の救済と超人の人物像——社会主義的短編」(『ジャック・ロンドン』三友社出版、1989), p. 121.
- 13 Jack Kerouac, *On the Road*, (Penguin Books, 1957), p. 8.

本論は、2007年、6月16日、成城大学で行なわれた日本ジャック・ロンドン協会第15回年次大会での研究発表の草稿に基づいている。